

一第82編一 ポルトガル植民文化の痕跡

マカオ^{*1}は不思議な都市である。16世紀の半ば以来、つい最近の1999年までポルトガルの植民地であった。中国大陸におけるヨーロッパ諸国の植民地の中ではもともと古く、域内に植民地時代の遺構が数多く点在する。やがて日本も訪れることになるカトリック教会宣教師のフランシスコ・ザビエル^{*2}が、ポルトガル政府の支援を得て、ここを拠点に東南アジア各地でキリスト教の布教活動を行っていたことはよく知られている。

世界銀行の統計によると、2009年のマカオの

GDPは185・99億ドル（約1・6兆円）であり、

日本で言えば鳥取県

（約2兆円）よりや

や小さい経済規模で

ある。従って、一人

あたりのGDPは非

常に高く、またカジ



写真82-1 タイパの広場



写真82-2 タイパの屋並みと高層の新市街地

*1 澳門 (Macau)：中国の特別行政区。人口約53・8万

*2 Francisco de Xavier (1506～1552)：スペイン生まれのカトリック教会宣教師。イエズス会創設者の一人



写真82-3 路傍の仏像

ノによる税収も潤沢であるため、マカオ特別行政区管轄下の住民には一人あたり年間約10万円相当の年金が支払われ、また教育、医療費は無料である。しかし、人口密度はなんと1kmあたり1万7千人を超え、ダントツの世界一である。

この超高密度が都心の重

たいまちの印象を決定づけ、中国本土からカジノを目掛けて殺到する農民たちを相手にした怪しげな貴金属店が軒を連ねる。賭け事にほとんど興味のない私にとって何よりも大きな関心の的は、ポルトガル植民地の痕跡が色濃く残るタイパ^{*3}のまちなみと住まいであった。といっても今ではポルトガル風のまちなみの中で、仏教文化と中国の生活文化が不思議に溶け合っている。その意味で細い路地の街角をひたすら歩き回る面白さはなかなかのものである。

異なる文化が接し、入り混じった後に、魅惑的なまちが出来上がる例は事欠かない。タイパはその代表例だが、通りがかったなじみの客にたまたま教えてもらったポルトガル料理店の味は、我々の期待に違わず格別であった。



写真82-4 タイパの寺院内観



写真82-5 タイパの路地

*3 Taipa：マカオ最小の島。ポルトガル人が1851年に占領